

あんげろす

目隠し

司馬純詩

司法の公正さを象徴するギリシャ神話のテミスは、天秤と剣を持つ女神である。欧米では、目隠ししていることが多い。俗世の判断を下すことの、神へ畏怖もこめている。

日本では、最高裁のブロンズ像を含めて、目隠しはない。

ハンセン病隔離政策の下、最高裁判断で「特別法廷」という密室裁判が95件開かれた。憲法76条2に「特別裁判所は、これを設置することができない」とある。訴えられた最高裁は4月25日、有識者の「報告」として「違法」を公表。寺田逸郎最高裁長官は、反省を「談話」の形で表明した。

結局、違憲を審査せずにごまかしたのである。

最高裁の違憲判断は、戦後70年に11件しかない。下級審への異議は、ほぼ全部、紙切れ一枚で却下される。

最高裁とは憲法の番人ではなく、権力の番人である。

パウロはギリシャの旅で、偶像文化に憤った。が、私たちは目隠しのない、神をも恐れぬ司法制度のもとにある。



徐正敏

キリスト教研究所の関係者のみなさまに、主の恵みをお祈りいたします。

今年の4月より、日本の大学での経験はまだ不足である私がキリ研の所長を務めることになりました。責任重大であると感じております。

日本のキリスト教の歴史において、明治学院大学が持つ意味は重いと思います。特に、日本での「キリスト教主義」の拡散、あるいは学問としての「キリスト教学」の伝統を確立してきた役割とその使命は、非常に重要な意味を持っていたと思います。

しかし歴史的転換期において、明治学院大学の神学部への伝統が途切れてしまったことは、本当に残念なことであると思います。かわりに、この大学の中心的な研究機関としてキリスト教研究所が設置され、キリスト教学研究の伝統を守り維持していくことは、すばらしいことだと思います。このような面からみても、キリスト教研究所の責任と今後の役割は重大なものであるし、明治学院大学の歴史を継承し、大学が掲げる目標の実現に繋がる中心的な役割を担っていると思います。

これまでのキリスト教研究所歴代所長の方々も、このようなことを認識しながら研究所の発展のために尽力してきたと思います。私もそのような伝統を継承しながら、研究所の発展と役割の拡大のため、微力ながら尽くしてまいりたいと思います。

まず、キリスト教研究所がこれまで重点をおいてきたプログラムをそのまま継承し、さらに発展させることが重要なことであると思います。それとともに、次のいくつかの項目のような新しい改革を考え、可能な範囲で推進していくという目標を持っています。

第一、現在活動している研究プロジェクトは今年度で一

区切りすることを機に、新しく改変するつもりです。継続するプロジェクトはさらに力をいれ、新しい改革が必要なプロジェクトは変革していきたいと思っています。

第二、来年2017年は宗教改革500周年の年であります。プロテスタントの伝統にたっている明治学院大学とキリスト教研究所のアイデンティティからみると、それを記念するプロジェクト、あるいは公開講座などを企画していきたいと思います。

第三、これまでも重点をおいてきたアジアのキリスト教、アジア神学の発展に、キリスト教研究所としてさらに力をいれていくつもりであります。これは、日本のキリスト教学が、名実ともに欧米神学の追従から脱却し、アジア神学の地盤をかためるところにたっていることを再確認することでもあります。

第四、明治学院大学において教育現場の第一線にたちキリスト教関連科目を担当している常勤、非常勤教員たちの研究業績を激励し、研究発表の場を拡大していきたいと思っています。これはキリスト教学における教育と研究のバランスを維持するという目標を実現するためであります。

第五、キリスト教研究所のもう一つのプログラムとして、キリスト教学の再教育、実験的研究コースを開設し、現場の牧会者、活動家、あるいはアジア各国のキリスト教宣教の分野に関心を持っている方々に研究、研修の機会を提供したいと思っています。はじめは、小規模の講座やセミナーになるかもしれませんが、新鮮な神学討論の場を設けることができるのではないかと期待しております。

以上のいくつかの夢がどのくらい具現化していくかは、様々な条件によって違ってくると思います。しかし、研究所の責任を担う者として、夢を見て一步一步あゆんでいくことは、重要なきっかけをつくることになるかと確信しております。これからも、キリスト教研究所関係者のみなさまの関心とご協力をお願いいたします。

そ・じょんみん（所長）

教会の課題としての食べること

植木 献

4月よりキリスト教研究所の主任となりました植木です。どうぞよろしくお願いいたします。

昨年度在外研究の機会をいただき、スコットランドのエディンバラ大学神学部で食とキリスト教の関連について1年研究をして来ました。その一部を簡単に報告したいと思います。

キリスト教的な食文化についての歴史的な研究は多くありますが、「食べること」について教義学的に組織的に検討することは、まだ一般的ではありません。今日「性」をめぐる議論が神学の課題ではないと断言することは少ないと思います。けれどもセックスよりも高い頻度で、しかも人前で行う「食べること」はなぜかあまり神学の俎上にあがってきませんでした。中世において七つの大罪の筆頭に「大食」が挙げられたことは、今のわたしたちには不当な断罪というか滑稽な強調にすら思えます。議論するまでもない、周辺的な課題に過ぎないとわたしたちは無意識に感じているのかも知れません。

けれども「食べること」が持つ社会的な意味合いについては、すでに人類学や社会学など社会科学系の分野では浩瀚な研究があります。レヴィ＝ストロースが料理こそが象徴操作のできる人間らしさを生み出したと論じたり、メアリー・ダグラスが食事が社会構造の縮図となることを指摘したことは、これらの研究の基礎になっています。

さらに動植物を食べることは自然界との繋がりでもありますから、環境問題やその倫理的課題としての研究も多くあり、食の安全や健康問題まで含めれば、かなりの分野間での共通テーマになります。そのため、エディンバラ大学では学際的な研究テーマとして、社会科学系の研究者が中心となり、多いときには週に2、3回セミナーが開催され、活発な議論が交わされていました。わたしもそこに頻繁に

参加し、議論に混ぜてもらってこれまで知らなかった事柄についての知識や、スコットランド、ヨーロッパの食をめぐる様々な課題を知り、よい刺激を受けました。

またエディンバラで非常にお世話になったある国教会の牧師先生からは、食とキリスト教の実践的関わりについて多くの示唆を得ました。この教会では、以前からホームレスなど社会的支援を必要とする人たちをサポートしてきたのですが、こうした人たちが一緒に食生活にも問題を抱えていることに気付き、スーブキッチンなど配食から方向転換して、料理教室を開いたといいます。教会の敷地の一角にコミュニティー・カフェをつくり、そこで自分の手で料理をし、支援者も一緒に食事をする場にしたら、健康的な食習慣が形成されただけではなく、手仕事自体が癒やしになった、作業中・食事中にこれまで誰にも話すことができなかったことを話せるようになった、食事をもらうよりも作る方をやりたい人が出てきたなど、多様な人たちが自由に出入りする活気のある食卓共同体ができたということです。想像していた以上のものが生まれたのを見て、教会は本来こういう場だったはずだと、この先生は聖餐から広がる恵みの確信を語ってくれました。

料理が人間らしさを作り出し、食事のあり方が社会の縮図であるならば、確かに「食べること」は教会形成の課題そのものです。予想以上の出会いと刺激を得て戻ったわたしも日本を初めとするアジアから新しい可能性について発信していけるようにしたいと思っています。

うえき・けん（主任）

おしゃべりなスペイン人、無口な日本人

清水有子

昨年からたまたま史料調査でスペインに渡航する機会が続いたが、随所で感じたのは、スペイン人とはcharlar（おしゃべり）好きであるなあ、ということである。

ホテルのスタッフやタクシーの運転手から、どこからいらしたのですか、と話しかけられるのは、多くはチップのためであろうけれども、例えば買い物の会計時。こちらが片言のスペイン語であってもお構いなく、今日からうちはセールをはじめたのよ、ところであなたは、ここに住んでいるの？などとおしゃべりを始める店員さんに会う機会が、日本よりもずっと多い。

スペイン語で人に話しかけるときは、“Oiga, por favor（オイガ、ホルファヴォール）”と言う。直訳すると「聞いて下さい」であり、その言葉を発すると、たとえ相手が外国人の私であっても、ただちに“Digame（ディガメ）！”「私に言って！」と返ってくる。この「ディガメ！」を合図に、町のあちこちで、おそらくは未知の者同士で、おしゃべりしている人たちがたくさんいる。

スペイン人は意思伝達の手段を、雰囲気などではなくはるかに、自らの言葉や表現力に依拠しているのである。ある日立ち寄ったスタバでは、店員どうしが客の目の前で、真っ赤な顔をして大声で議論していたが、このような光景は、日本ではまずお目にかかれない。

ということは逆に、もしスペイン人が日本に来たら、日本人とは無口で何を考えているかわからない、ということになるのだろうか。昔から日本人はイエス、ノーがはっきりしないとよく言われるが、彼らは本当にそう感じているのか。そこで思い出したのが、今から約430年も前、はじめて日本を訪れた（スペイン人ではないが）イタリア人宣教師の手による、次のような記録である。

「……彼等は、感情を表わすことにはなほだ慎み深く、

胸中に抱く感情を外部に示さず、憤怒の情を抑制しているので、怒りを発することは稀である。したがって彼等のもとでは、他国の人々のように、街路においても、自宅においても、声をあげて人と争うことがない。……換言すれば、互いにはなほだ残忍な敵であっても、相互に明るい表情をもって、慣習となっている儀礼を絶対に放棄しない。この点について生じることは吾人には理解できぬし、信じられないばかりである。それは極端であり、誰かに復讐し、彼を殺害しようと決意すると、その仇敵に対してそれまでよりも深い愛情と親睦さを示し、共に笑い共に喜び、状況を窺い、相手をもっとも油断した時に、剃刀のように鋭利で、非常に重い刀に手をかけ、次のような方法で斬り付ける。……」「……彼等は交際において、はなほだ用意周到であり、思慮深い。……誰かに逢ったり訪問したりする時、彼等は常に強い勇気と明快な表情を示し、自らの苦勞については一言も触れないが、あるいは何も感ぜず、少しも気にかけていないかのような態度で、ただ一言それに触れて、あとは一笑に附してしまうだけである。一切の悪口を嫌悪するので、それを口にしないし、自分達の主君や領主に対しては不満を抱かず、天候、その他のことを語り、訪問した先方を喜ばせると思われること以外には言及しない。……かくて日本人の間には、よく一致と平穏が保たれる。……」（ヴァリニャーノ『日本巡察記』松田毅一他訳、平凡社、1973年）

ほらやっぱり、日本人は心中のありのままを言葉や態度で表現しない、とヨーロッパ人に評価されている。そして驚くべきことに、この約430年前の宣教師の記録は、現代の日本人にも多くが当てはまるように見える。

日本人は無口を好む。できるだけ発言や表現をしない方法を選ぶ。会議が根回された決定事項の確認の場であるのは、そしてレジで「買い物袋はいりません」という札が置いてある国は、世界中で他にどれくらいあるのか。そんなことさえ、日本人は口に出してははっきり言いたくないのである。そして言葉に出さなくとも、表現しなくとも、お互

い理解しあっているというのが、日本では前提である。だから、その雰囲気を理解できない「KY」は、おそらく約430年前から、日本では致命的である。ある日突然、笑顔で斬られるのである。

反対に、言葉や態度に依拠した意思疎通は健全のように思える。けれども一方ではスペインのスタバの現場のように、紛争をもたらしやすい方法ともいえる。どちらが良いと受け取るかは、各人の、生き方や哲学や思想によるのだろう。

蛇足ながら筆者は、“Digame!”の響きに最近魅力を感じている。近年はスペインのほうが気楽である。日本はどこよりも平和で安全で清潔でと思う一方で、いうなれば、「容易に表現し得ない国」である。表現を生業とする研究者でありながら（否、だからこそ?）こうである。何かが、息苦しいのである。



写真上：ヴァリニャーノの肖像（J.F.Schütte S.J.著「ヴァリニャーノ研究」第1巻より）

写真下：「日本要録」写本の冒頭（アジュダ図書館所蔵）

（上下とも『日本巡察記』ヴァリニャーノ・松田毅一他訳、平凡社より転載）

しみず・ゆうこ（協力研究員）

「礼拝の言葉、講義の言葉」（その1）

高橋一

日本におけるキリスト教学校には、中学、高校、大学を問わず、ほとんど必ず礼拝（チャペルアワー）の時間が設定されている。時間枠、回数、生徒・学生の参加の自由度は違っているが、キャンパスの中の礼拝堂を用いて、礼拝がそのキリスト教学校のアイデンティティや理念を体現する機会となっている事実は共通していよう。明治学院大学でもそうであると思う。また、キリスト教関連科目を担当している人は、その礼拝活動に何らかの形で責任を担っている。

と同時に、礼拝と並んで、これはキリスト教学校の学生にとってほぼ必修科目となっている場合が多いが、いわゆる「キリスト教概論」の講義もオファーされている。こちらは講義なので、成績評価の義務が生じる。それゆえ礼拝の場合とは対照的に、その講義への関心度、意欲には人によって大きな違いが生じがちである。よい成績をとるために講義に熱心に参加する学生もいるであろうし、成績はとりあえず脇において、学問や講義そのものに知的意欲を喚起させられて取り組む学生もいるであろう。

ところで、筆者も今まで日本のいくつかのキリスト教大学で、礼拝と講義の両方を担当すべく多少の苦勞を重ねて

来た。その体験から、そこで用いる「言葉」をめぐって、時に困惑させられ、時に不意の喜びを感じる瞬間があったことを思い起こす。いったいどのような「言葉」が礼拝や講義には要請されるのであろうか。その二つの現場で用いられる「言葉」には何か質的な違いがあるのだろうか。そのことを考える上で思い出すあるエピソードを記してみた。

精神医学者で『甘えの構造』というロングセラーを著した土居健郎氏を知る人は多いと思う。私は個人的に何度か言葉を交わしたことがあるが、土居氏はプロテスタントの家庭から無教会を経てカトリックの信仰に入られるという、キリスト教世界の中でやや特異な信仰遍歴を経ておられたためか、プロテスタントの神学者や牧師にたいしてはややシニカルな視線を投げかけていた（ようにわたし自身は感じた）。—「ほんとうに苦しんでいる人はわたしたち精神科医のところに来ますが、“罪人”はみなさんのところに来られるでしょうね」とは、プロテスタントのある神学校で神学生たちに語った言葉であった。ただ、個人的にお話すると、人懐っこい一面も感じさせられたが・・・。

その土居健郎氏が、「宗教者の文体について」というエッセイで、いわゆる礼拝の（特にプロテスタント教会の礼拝の）「説教」の言葉に触れてたいへん厳しい指摘をしている。このエッセイは、土居氏の信仰の師となったドイツ人のヘルマン・ホイヴェルス神父（1823年（大正12年）に来日、1977年（昭和52年）に87歳で逝去）の書物を復刊されるさいに、神父を偲ぶ文章として書かれたものである。以下に引用してみよう。（ ）は筆者の補足である。

「いったいなぜホイヴェルス神父の書いたものをあらためて世に出すのか。それは神父の日本語の文体がいかにユニークでぜひとも後世に伝えたいとわれわれが考えたからである。もちろん神父の書いたものだから内容はキリスト教である。しかし私は神父のごとくキリスト教を説いた者を他に知らない。というのは（世の多くの牧師や伝道

者の）非常に多くの場合、書かれている内容と書いている人との間にすき間がある。・・・これは書かれたものでなく、話されたものでも同じである。たとえば、世に「お説教」と言われるものがほとんどすべてそうであるように、何とか聴衆を感心させようと躍起になっている説教者の思いばかりがこちらに伝わって、やりきれない気持ちになることが少なくない。しかしホイヴェルス神父の場合には一切そういう感じがしなかった。神父の一言一句は何かしみ透るように聞く者の心に響いたものである」（下線は筆者）。

「神父の一言一句は何かしみ透るように聞く者の心に響いたものである」。この最後の一節を読んで、わたしもそういう印象を与えられる礼拝でのメッセージ、あるいは講義での「言葉」を聞いてみたいものだと思わされたのである。



ヘルマン・ホイヴェルス神父

たかはし・はじめ（協力研究員）

雑録

この一年、食べもののことばかり考えて過ごしていた。研究上のテーマでもあったし、また異国で過ごす毎日の生

活上の課題でもあったから、買い物は楽しかった。

食のグローバル化により、世界中どこに行っても同じものが並ぶと思っていたが、思いの外知らない野菜たちがあるもので、店頭に並んだ見慣れない姿は興味をそそられる。

サムファイア(Samphire)はその筆頭だ。育ちすぎたスギナのようなこの野菜は、生でかじるとシャキシャキとした食感で塩味がする。あまりにしよっぱいなので、気のせいとも思えず調べると、海辺で育つこの野菜は本当に塩分を含むらしい。味と食感はやはり塩生植物のアイスプラントによく似ている。

シーフードの付け合わせによく使われると聞き、塩味を加減したホタテやエビのマリネに生のまま合わせてみると確かにおいしい。強火でさっと炙って生牡蠣にレモンと一緒に添えてもいいける。味付け代わりに使えるサムファイアは炒め物にもいいので重宝し、一気にファンになった。

ヨーロッパでは一般的な食材らしいが、最近ではイスラエルからの輸入品も多いらしい。それを知ったのがイースターの頃だったので、ひょっとしたらイエスも復活したあと、弟子たちに焼いて食べさせた魚に添えていたのではないかなどと妄想を膨らませた(ちなみにサムファイアの語源は仏語のSaint Pierre漁師の守護聖人ペテロにあり、弟子たちが捕っていたとおぼしきティラピアはSt. Peter's fishとも呼ばれ、偶然ではあるが語源が一致する)。

わたしは旅行に出かけたとき食べたものの記録を詳細に残す。食べものの記憶は私たちの感覚まで呼び起こすので、その時の経験が鮮明によみがえるからだ。主に再会した弟子たちも食べた焼き魚の味と一緒にきつと復活の喜びを何度もかみしめたのだろう。聖書にさりげなく残された食べものの記述は、おそらくわたしたちの感覚的・身体的な喜びが軽視されていないことの証だ。復活が観念的なものではなく食べる喜びを伴っていたからこそ、体のよみがえりを信じることができるのだと思う。

うえき・けん(教養教育センター准教授・主任)

研究所活動(2016年4月～7月)

キリスト教芸術研究プロジェクト公開研究会

「ドイツ語オラトリオのレチタティーヴォ歌唱法」

開催日時:2016年4月4日(月)19:00-21:00

開催場所:明治学院大学白金校舎アートホール

講師:クヌート・ショホ(ハンブルク音楽院教授)

通訳・司会:加藤拓未(明治学院歴史資料館研究調査員、
本学キリスト教研究所協力研究員)

宣教師研究プロジェクト公開研究会

「成瀬仁蔵の帰一思想

—その生成過程及び帰一協会との関わり—」

開催日時:2016年6月23日(木)18:15-19:45

開催場所:明治学院大学白金校舎キリスト教研究所

講師:辻直人(北陸学院大学教授)

「ある未完訳のフルベッキ書簡をめぐる——

1866年・村田・綾部への授洗記録」

開催日時:2016年7月9日(土)13:30-15:30

開催場所:明治学院大学白金校舎92会議室

講師:中島一仁(朝日新聞東京本社社員)

キリスト教と平和学・赦しと和解研究プロジェクト公開上映会

「ドキュメンタリー『わたしの自由について』上映会」

開催日時:2016年7月9日(土)15:30開場 16:00上映開始

開催場所:明治学院大学白金校舎2号館2101教室

戦後の宣教師研究プロジェクト研究会

第1回

開催日時:2016年4月14日(木)13:00-

開催場所:明治学院大学白金校舎キリスト教研究所

第2回

開催日時:2016年5月26日(木)13:00-

開催場所:明治学院大学白金校舎キリスト教研究所

第3回

開催日時：2016年6月23日(木)13:00-

開催場所：明治学院大学白金校舎記念館小会議室

新着図書

- ・『説教黙想 アレテイア』No.92、日本基督教団出版局、2016。
- ・『エイコーン—東方キリスト教研究—』第46号、教友社、2016。
- ・『福音と世界』No.4、新教出版、2016。
- ・『福音と世界』No.5、新教出版、2016。
- ・『福音と世界』No.6、新教出版、2016。
- ・『福音と世界』No.7、新教出版、2016。

2016 年度メンバー

所長 徐 正敏

主任 植木 献

所員

教養教育センター： 嶋田彩司、永野茂洋、渡辺祐子

文学部： 久山道彦、齊藤栄一、播本秀史

経済学部： 鵜殿博喜、大西晴樹、手塚奈々子

社会学部： 坂口 緑、佐藤正晴、深谷美枝

法学部： 鍛冶智也

国際学部： 司馬純詩

(以上 16 名)

名誉所員

遠藤興一、小田島太郎、加山久夫、久世 了、佐藤 寧、柴田 有、千葉茂美、
辻 泰一郎、中山弘正、新倉俊一、橋本 茂、花田宇秋、真崎隆治、丸山直起、
水落健治、森井 眞、山崎美貴子、吉田 泰

(以上 18 名)

客員研究員

朱 海燕、豊川 慎

(以上 2 名)

協力研究員

Andrew H. Ion、石川 理、石本東生、一色 哲、稲垣久和、今村正夫、岩崎次郎、
岩田ななつ、大倉一郎、岡部一興、加藤拓未、北川一明、木村 一、清澤達夫、
小暮修也、小林孝吉、齋藤元子、佐藤飛文、島田由紀、清水有子、下村 優、
徐 亦猛、鈴木 進、孫 永律、高井ヘラー由紀、高橋 一、田中浩司、辻 直人、
手代木俊一、中井純子、中島耕二、原 豊、洪 伊杓、牧 律、松谷嘩介、丸山義王、宮坂弥代
生、村上志保、村上文昭、吉馴明子

(以上 40 名)

教学補佐

杉田有衣

(以上 1 名)

あんげろす ΑΓΓΕΛΟΣ

とは、「メッセンジャー」・「天使」の意。

あんげろす 第70号

2016年7月10日 発行

明治学院大学キリスト教研究所

〒108-8636 東京都港区白金台 1-2-37

TEL: 03-5421-5210 / FAX: 03-5421-5214

Email: kiriken@chr.meijigakuin.ac.jp

題字：澁谷 浩